

大災害から九年後の「いま」を刻み、記憶の彼方に埋もれさせないために！

東日本大震災から九年……

この間の国や県、当該自治体が考える復興と、

被災者・避難者の考える復興とのあいだには大きな〈落差〉がある。

本書は、被災者にたいする支援と自立のありようをトータルに捉え、

「人間の復興」という願いを込めて、その状況を明らかにするモノグラフ

〈生活記録〉第3弾！

全Ⅲ部の構成による本書は、第Ⅰ部では復興の現状を、第Ⅱ部では〈自立・支援〉活動の実相を、第Ⅲ部では復興の記録の方法とレガシーの中身の検討を中心に、〈自立・支援〉の「いま」と「これから」を問い質す論考二八本を収録！

東日本大震災と 〈自立・支援〉の 生活記録

●編著 吉原直樹・山川充夫

清水 亮・松本行真

●推薦 室崎益輝



シリーズ
完結！

六花出版

推薦します

室崎益輝

(むろさき・よしてる) ●兵庫県立大学

大

規模な災害は、自力で立ち上がれない被災者や被災地を無数に生み出す。と同時に、その時々、社会が孕んでいる社会矛盾を顕在化する。それゆえに、災害後の救援から回復さらには復興の過程では、被災者の自立や被災地の再生をはかること、顕在化した矛盾に立ち向かい社会変革をはかることが求められる。その自立と変革という課題に、被災者や被災地がいかに立ち向かい、いかなる成果を勝ちえたかが、復興の検証では厳しく問われることになる。

本書は、その自立と変革のプロセスを、被災現場に寄り添いながら多面的に明らかにした、集団的労作である。東日本大震災の復興の成果と教訓を、光と影の両面から科学的かつ政策的に明らかにしている。次の災害への備えとしてだけでなく、未来の社会創造の糧にもなる知見が盛り込まれている。被災地の人々の労苦が反映しての豊かな内容ではあるが、執筆された専門家の熱い視点が実つての素晴らしい内容になっている。

とりわけ、その分野横断的な総合性と地域密着的な親近性を、高く評価したい。総合性ということでは、異なる分野や多方面の領域が一つの素晴らしい織物を編むように融合している。親近性ということでは、被災者と被災地に対する温かい思いが太い糸のようにつらぬかれている。福島への熱い思いもひしひしと伝わってくる。東日本大震災の総括的記録として、常に手元に置いておきたい良書である。

新刊

東日本大震災と〈自立・支援〉の生活記録

●目次

第一部 復興のいま

復興庁の二つの顔——計画行政と再帰的ガバナンス

計画の推進状況からみた新たな東北圏広域地方計画の特徴

「人はひとなか」による復興

「被災地支援」から「地域活動」へ——宮城県亶理郡亶理町における復興まちづくりの主体

産業創出を核とした復興まちづくり——福島県相馬郡新地町を事例として

原子力災害被災地における商工業復興——福島県南相馬市を事例に

原子力災害からの復興過程における共同性の諸相

原発事故被災地の復興に向けたボランティア・ネットワークの取り組みと課題

——双葉郡未来会議を事例に

福島県内自治体の「作業員」への対応と川内村における除染事業主体の取り組み

復興することの物語とその主体

「地域専門家」の一つのかたち——中間貯蔵施設に向き合う人びと

第二部 〈自立・支援〉の諸相

住民組織主導による自立的な避難体制構築に向けた支援

——いわき市沼ノ内区を事例に

避難指示解除後の地域福祉の課題——糟葉町の福祉事業者に対するヒアリングを中心に

復興公営住宅居住者の食生活と食支援——会津若松市の復興公営住宅を事例として

県外避難者支援の現状と課題——新潟県精神保健福祉協会の取り組みから

東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室の経験と学生ボランティアの課題

被災地・者の〈自立〉に向けた学生ボランティアの葛藤と模索

——東北大学が受け継いだ系譜と新たな展開

復興グッズに見る自立と支援——ハートニットプロジェクトの展開

農業復興支援の可能性と課題——ふくしまオーガニックコットンプロジェクトの事例

生業復興と販路形成

——サードセクターは、なぜそしてどのように、被災した生産者を支援したのか

一人ひとり 寄り添い 多様性を紡ぐボランティア

第三部 復興記録の継承と検証

原子力災害被災地における災害アーカイブズ構築のための資料収集とその目的

東日本大震災の記録を残す活動と震災遺物保存の意味——福島県を事例として

福島県いわき市の住民819人を対象とした防災意識調査

他人事から自分事へ

——福島第一原発事故の被災者取材を通じて、大学生はどう変わったのか

震災体験記から読み解く東日本大震災と減災へのサジェッション

食品放射能計測所「いのり」による支援活動——東北ヘルプの原子力被災地支援

福島県復興祈念公園のコンセプト形成——福島県からの提言を中心に

菅野拓

野々山和宏

山崎憲治

望月美希

大塚彩美・平野勇一郎・中村省吾・藤田壮

初澤敏生

松本行真

加井佑佳

松本行真

高木亨

山田修司

吉原直樹

班目佳小里・松本行真

齊藤綾美

佐藤真理子

田村啓子・松井克浩

米村滋人

菊池遼・藤室玲治・江口怜・松原久

清水亮

三浦倫平

齊藤康則

村井雅清

瀬戸真之

深谷直弘

中村洋介・島崎麻衣

高橋弘司

瀬谷貢一

川上直哉

山川充夫

東日本大震災と被災・避難の生活記録

●目次

第一部 復興とまちづくり

復興とまちづくり

東日本大震災と東北圏広域地方計画の見直し

終わらなき「中間」のゆくえ——中間貯蔵施設をめぐる人びと

建設業の公共性と地域性——東日本大震災復興事業調査の中間報告

震災からの商業地の復興——田老地区仮設商店街・たちちゃんハウスを事例として

震災遺構の保存と防災教育拠点の形成

災害記憶とその継承のための仕組みに関する考察——東日本大震災の記憶継承に向けて

震災まちづくりにおける官民連携の課題——福島県いわき市平豊間地区を事例に

東日本大震災復興に向けた組織の現状とその類型

——いわき市被災沿岸部豊間・薄磯・四倉地区を事例に

吉原直樹

野々山和宏

吉原直樹

千葉昭彦

岩動志乃夫

高橋雅也

金城敬太

磯崎匡・松本行真

菅野瑛大・松本行真

第二部 コミュニティ・ネットワーク・ボランティア

災害の避難空間を想像するフィールドワーク——内部者として、外部者として

災害支援NPOと地域コミュニティ——越境する災害文化と鍵を握る平時からの協働

顕在化した都心のデイバインド——仙台市中心部町内会と避難所の関わりから

災害対応におけるイノベーションと弱い紐帯

——仙台市の官民協働型の仮設住宅入居者支援の成立と展開

長期避難者コミュニティとリーダーの諸相——福島県双葉郡楢葉町・富岡町を事例に

——福島県いわき市平豊間地区を事例に

自主防災組織と消防団との連携のあり方——宮城県東名地区の事例

——釜石市唐丹地区を事例として 竹内裕希子・須田雄太・シヨウウラジブ

原発事故避難者による広域自治会の形成と実態——福島県双葉郡富岡町を事例に

——コミュニティ・オン・ザ・ムーブ——破局を越えて

小田隆史

伊藤嘉高・千川原公彦

菱山宏輔

菅野拓

松本行真

菅野拓

松本行真

後藤一蔵

松本行真

吉原直樹

第三部 被災後の生活と情報

いわき市へ避難する原発避難者の生活と意識

——福島第一原子力発電所事故による避難者の生活と選択的移動

——人的資本論にもとづく「大熊町復興計画町民アンケート」の分析

原発災害避難者の食生活のいま

——東日本大震災発生時の豊間小・中学校等の事例から

大学の防災における安否確認に関する考察

——首都直下地震に対して東日本大震災からどのような教訓を得るのか

福島第一原子力発電所事故後の風評被害と心理的「一般化被害」——「絆」はほんとうに強まったか

放射能は「地元」にどのように伝えられたのか——自治体による情報発信と報道に注目して考える

東日本大震災後の仙台市の病院・診療所に関する支障と情報ニーズについての分析

原発災害をめぐる大学生の態度

川副早央里・浦野正樹

磯田弦

佐藤真理子

瀬谷貢一

地引泰人

仁平義明

関根良平

田中淳

本多明生

東日本大震災と〈復興〉の生活記録

●目次

第一部 ささまざまな復興

「小文字の復興」のために

——東日本大震災と東北圏広域地方計画の見直し」のその後

見直し中断の影響と国土形成計画の変容

原発事故の被害構造——福島県中通り九市町村の母子の生活健康調査からの報告

復興の「ものさし」にみる宮城県内被災者の生活復興過程

釜石市唐丹の集落復興プロジェクト第一幕

異なる立場から被災地の将来像を織り上げる

——サードセクターからみる復興ガバナンスのありよう

復興組織における組織間関係の変遷——復旧期から復興期を事例に

復興過程における市民会議の役割・機能の変遷

巨大災害発生後における国家レベルの復興組織の評価枠組みの構築に向けて

——国際事例による検証の試み

吉原直樹

野々山和宏

成元哲

佐藤翔輔

神田順

菅野拓

菅野瑛大・山岡徹

磯崎匡

地引泰人・井内加奈子

第二部 復興とコミュニティ・メディア・ネットワーク

転機を迎えた楢葉町の仮設住宅自治会

生活「選択」期を迎えた富岡町避難者と広域自治会の役割

生活を支援することの困難さ——大槌町での五年間

津波被災者と原発避難者の交流——いわき市薄磯団地自治会といわきまごころ双葉会の事例

東日本大震災後に問われる地域防災のあり方——岩手県洋野町の事例

被災地の非営利組織で働く「第二世代」の生活史——活動と雇用のあいだを揺れ動くNPO

自主避難者の対話的交流と派生的ネットワーク——母子避難という経験の語りから

復興への燭光——会津会と「會空」をめぐる人びと

避難者の食生活・寸描——浪江町出身三人の聞き書きより

地域に開かれ、地域から開かれた臨時災害放送局——山元町「りんごラジオ」

被災小学校から生まれる学校と地域の新しい連携の可能性

——被災児童を支える豊間アカデミー PTAからPTSAへ

松本行真

松本行真

新雅史

齊藤綾美

後藤一蔵

齊藤康則

高橋雅也

吉原直樹

佐藤真理子

松本早野香

瀬谷貢一

第三部 復興支援と市民社会・ボランティア

〈災害時経済〉Disaster Time Economyの連帯経済の試み——市民共同財の形成による現代的コモンズ論

原子力災害の被災地における支援の可能性

被災地 釜石の住民活動——NEXT KAMASHIのケース・スタディ

足湯ボランティアの聴いた「つぶやき」と被災者ケア

震災後の〈生きがい〉としての農業に向けた支援の実践

——宮城県巨理郡巨理町「健康農業巨理いちご畑」を事例として

「支援の文化」の蓄積と継承——原発避難と新潟県

被災経験からの防災教育——理科教育・論理的思考教育との融合への流れ

知識と復興支援

「実装」プロセスにおける安全・安心を決める論理と倫理

似田貝香門

川上直哉

大堀研

三井さよ

望月美希

松井克浩

久利美和

松平好人

山田修司

既刊図書のご案内

東日本大震災と
〈自立・支援〉の生活記録



●編著——吉原直樹（横浜国立大学教授・東北大学名誉教授）

山川充夫（福島大学名誉教授）

清水 亮（東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授）

松本行真（近畿大学総合社会学部准教授）

●推薦——室崎益輝（兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科研究科長）

東日本大震災と
被災・避難の生活記録

●編著——吉原直樹・仁平義明・松本行真

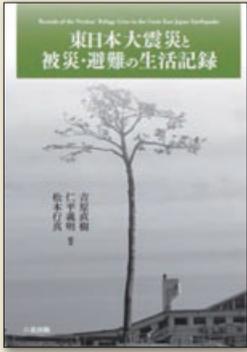
●推薦——小泉秀樹（東京大学大学院工学系研究科教授）

●体裁——A5判・上製・770ページ

●定価——8,000円＋税

2015年3月刊行

ISBN978-4-905421-80-1



東日本大震災と
〈復興〉の生活記録

●編著——吉原直樹・似田貝香門・松本行真

●体裁——A5判・上製・780ページ

●定価——8,000円＋税

2017年3月刊行

ISBN978-4-86617-027-5



●体裁——A5判・上製・850ページ

●定価——8,000円＋税

2020年7月刊行 ISBN978-4-86617-097-8

*表示価格はすべて税別。



六花出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-28 電話 03-3293-8787 FAX 03-3293-8788 <http://rikka-press.jp>